「食」を育む牧場

明治大学 農学部 食料環境政策学科　3年　磯沼 杏

中学生の頃、友人に「家で牛を飼っているのに、牛肉食べるの？よくできるねぇ。かわいそうじゃないの？」と聞かれたことがあった。言われた時は、すぐ答えられなかったが、すごくモヤモヤしたことを覚えている。その質問は、「かわいそう」とはどういうことなのだろう？と私に考えさせてくれた。

仔牛のころから世話をすれば愛着がわくのは当然で、農家が牛に対して無感情なわけはない。しかし、牛はあくまで家畜すなわち経済動物であり、生乳生産の手段なのだ。ペットのように愛でているだけでは経営は成り立たず、結局その牛たちを手放すことになるだろう。だからといって、生産手段としての効率だけを求めれば、牛に過度なストレスを与えてしまい、生きものとしての扱いをしていないことになる。こうなったら、それこそ「かわいそう」だ。

しかし本当に「かわいそう」なのは、牛が命を捧げた肉、母牛が頑張って出した乳が、飽食の中で簡単に廃棄されてしまうことではないだろうか。年間約1900万トンの食品廃棄物の中には、多くの食品ロスが含まれている。そうした食べものは、「おいしい」と言われることも、エネルギーになることもなく役割を終えてしまうのだ。食育について関心をもったのは、こうした事実を知った時だった。

酪農家は、牛のストレスを最小限にする努力をやめてはならないし、一方で消費者は食べものをもっと大事にしなければならない。この二つのうち、これから大きな力を持つのは後者であろう。なぜなら、酪農家、つまり生産者も消費者であるからだ。生産者の努力も、消費者の選択次第で水の泡になりかねない中で、どうしたら消費者に良い生産を支えてもらえるだろうか。

たくさんの情報が氾濫する現代で、情報をキャッチすることや、信用がおける情報なのかを判断することは容易いことではない。そこで根強い信用を得るためには、触れること、見ること、食べることといった実体験が必須であり、このような食育の場を具体的に提供し得るのは生産者である。

私の実家は、東京都八王子市で酪農を営んでいる。最寄りの駅から、徒歩でも来ることができる場所にあり、牧場の周辺は住宅地である。祖父の代には1頭であったが、父が経営を引き継いでから規模拡大し、今では搾乳牛と育成牛を合わせて約100頭の牛がおり、搾った生乳を牛乳の他、ヨーグルト、チーズ、アイスクリームなどに加工して販売している。

また、「酪農教育ファーム」として、週末の乳搾り体験や、年間を通じて行うカウボーイ・スクール、職業体験の受け入れなども行っている。実際に見る牛は、本やテレビ画面の中より何倍も迫力があり、怖がる子もいれば興味津々な子とさまざま。乳を触ってみて、搾って

みて、あたたかさを知って、というリアルな体験が、牛は機械ではなく生きものなのだと教えてくれる。

私は実家のアクセスの良さを活かして、もっと多くの人に生きものの素晴らしさ、食べもののありがたさを実感してほしい。

そのために私が今後どうしていきたいか。

一つ目は保育園と提携して、園児の日常に、「生きもの」や「食べもの」に触れる時間を提供したい。私自身、小さい子が大好きで、農学部じゃなければ幼児教育や保育学科に入っていたはずである。子どもたちの物心が形成される段階に、ぜひわが家を実践的な食育の場として有効に利用してほしい。

毎日の給食や散歩の時間、田んぼや畑を使って遊んだり体験したり。いつか大人になっても、生きものや自然と過ごした時間を覚えていて、関心を持ち続けてくれたら良い循環になるのではないだろうか。

また、保護者が憩えるようなスペースを作り、そこで小さいカフェのようなものを開いてみたりする、というのも素敵だと思う。子どもだけでなく、大人にも生きものと食べものについて考えを深める機会を提供し、満喫してほしい。多くの親が食育に関心を持ってくれることで、より多くの子ども達が食について学ぶ機会が増えるだろう。

二つ目は、先にあげたようなことを実現化するためにも、仲間を集めたい。

私は大学に入学するまで実家を継ぐのが嫌だった。それは孤独感からだと思う。わが家の周りは前述したように住宅地だし、田んぼや畑を管理しているのは高齢者が多い。家の目の前にあった田んぼは住宅地となり、通学路にある畑は荒れ果てている。そして、小・中・高と農業後継者のような人に会ったことがなく、「農家＝マイノリティー＝理解されない」といった意識が私の中にあったのだろう。

ところが、農学部に入って考え方が変わった。

農学部を選んだのは、農業について勉強したいというより、「実家を一緒に継いでくれそうな人を探す」という目的が大きかったけれど、まだそれらしき人は見つかってはいない。でも、それよりももっと大きな収穫があった。それは、同世代の農家の後継ぎに出会えたことだ。同じような境遇や悩みを話せる人がいることで、どれだけ気持ちが楽になったか。前向きな姿勢を見せてくれる先輩や同輩たちは、私の実家に対しての見方を大きく変えてくれた。もっと小さい時から、積極的に携わっていれば良かったと後悔するほどである。今後、みんながどうやっていくのか楽しみだし、応援したい。そして、私もみんなに自慢できるくらいになってみせたい。

気持ちの変化をもたらしたのは、大学だけではない。去年の秋、わが家の牛乳、乳製品を直売する店が駅ビルの中にでき、そこにアルバイトとして関わり始めた。牛乳やヨーグルトで

作るソフトクリームが看板商品で、店内のイートイン・スペースで食べることができる。

ここに設置された感想ノートには、「すごくおいしかった」「八王子に牧場があるのを初めて知って行ってみたい」「これからも頑張ってください」などの言葉が多く寄せられている。ノートを見るたびに気持ちが前向きになり、もっと誇れるようになりたいと思わせてくれる。店長は、より多くの方に商品を知ってもらえるように日々一生懸命で、他の店とのコラボレーションやイベントをすることでさらに認知度を上げてくれている。そのおかげもあって、リピーター客が多く、贈答用に利用してくれる方もいる。私は「農家は家族経営でどうにかやっていくもの」という意識が強くて、それだとメンバーの交替もないし、身内で一生涯仕事をするので、なんととなく窮屈な印象を抱いていた。でも、直売店での経験は、いろいろな人と共に牧場のもつ機能を活かしていきたいと思うきっかけとなった。

以上のことから、一緒に牧場を盛り上げてくれる人たちとチームを作りたい。そのためにも、同じ世代の農家の人たち、農家でなくても関心のある人たちともっと関わり、積極的に地元のイベントなどに参加して情報を収集していきたい。

思い返せば、実家が酪農家であるからこそ、様々な良い経験をしてきた。真夜中に牛に追われたことで、生きものを相手にすることがいかに大変かを知った。見えない細菌と闘う怖さも知った。世の中、都合良くいかないものだと強く感じた。大変ではあるけれど、これが現実だった。だから生きものも食べものも尊い。

これから先、自分の子どもや孫、地元だけでなく他地域、特に大都会で暮らす人たちにも生きものや食べものの大切さを日常から感じて生きてほしい。そのためにも、地域に根ざす、夢あふれる酪農家でありたい。